

立命館大学 政策科学部

知床の大自然の中で地域住民と繋がり、新しい気付きや価値観を得ることを目的とした実習



PLAN

9月9日～13日

- ☑ 4泊5日の長期型実習
- ☑ 文系学生
- ☑ 観光プログラムも含んだ実習



知床五湖トレッキング

ヒグマレクチャーを受講し、地上遊歩道を散策。自然の成り立ちから国立公園の制度まで幅広く学びました。知床五湖までの道中ではヒグマにも遭遇!



ウトロ地区の見学

オロンコ岩から広い海やウトロの街、漁港を見学。知床世界遺産センターでは知床半島の模型や動植物の展示などを通してさらに知床への知識を深めました。



開拓小屋コース散策

「しれとこ 100 平方メートル運動」の森づくりが学べるコースをスタッフの解説を聞きながら散策。開拓の歴史や現場スタッフの苦労などを聞きながら知床のもう一つの顔を学びました。



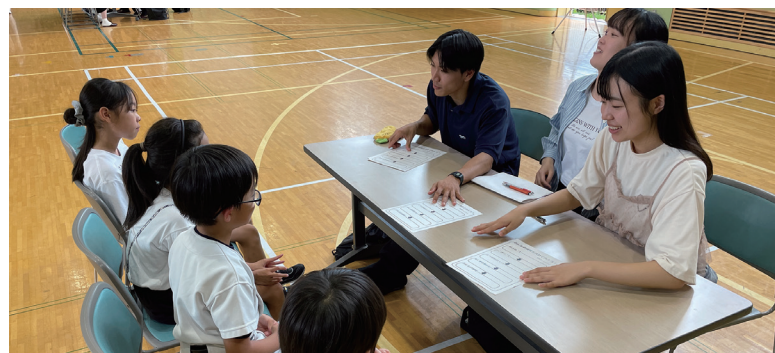
大学×民間ホテル ゴミ拾いとワークショップ

ウトロの民間ホテルとの共同プログラム。ヒグマとの共存について学びながらゴミ拾い活動をし、その後はオホーツク管内の学生と新しい観光コンテンツを考えるワークショップを行いました。



ウトロ学校での発表

ウトロにある小中学校に出向き、大学生の生活や、立命館大学の紹介、小中学生の時に取り組むべきだったことなど、大学生が各自考えてきたテーマをグループごとに発表しました。付近に大学が無いウトロに住む子どもたちにとって、大学生と話せる機会は貴重です。大学生との関わりを通して、子どもたちの将来の選択肢が増えるきっかけになっているかもしれません。



活動レポート

学生実習 For the Future of Shiretoko!

一次世代へ伝え、知床の未来へー 普及企画係 米田 紗衣

知床財団では、全国の小学校から大学までの実習受け入れを行っています。数時間程度の講演対応もあれば、学生たちが数日間知床に滞在し、知床財団が担う野生動物管理や調査研究、公園管理の現場研修を反映したプログラムを行うこともあります。今回の特集では 2024 年度に実施した 2 校の実習の様子をレポートします。

北海道大学 獣医学部

フィールドでの専門的な調査・研究を通して、新しい知見や調査技術を身につけることを目的とした実習



PLAN

9月25日～27日

- ☑ 2泊3日の中期型実習
- ☑ 理系学生
- ☑ 屋外でがっつりフィールド調査



詳しい調査の結果はこちらからご覧ください



調査研究の方法

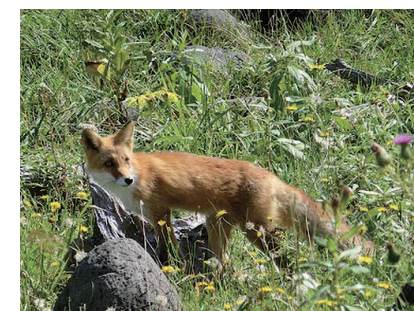
北海道大学 獣医学部の実習対応は 2000 年から始まりました。毎年、学生が自らテーマを設定し、テーマごとにチームに分かれてフィールド調査や研究を行います。今年には以下の 3 チームで調査を行いました。

Team ヒグマの食性と行動調査



ミズナラの豊凶調査、GPS を用いた痕跡調査、ヒグマの糞の内容物から季節変化や行動の差を調査しました。

Team 動物の感染症



キツネやヒグマなどの糞を用いて、エキノコックスをはじめとした人獣共通感染症の感染状況を調査しました。

Team 知床の植生調査



エゾシカによる採食圧が植物種の構成や外来種の生息状況に影響しているのかを調べました。

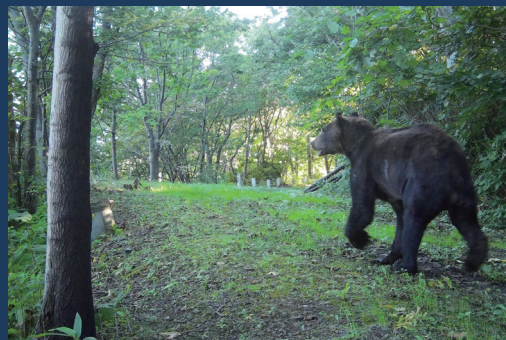
2024年度のヒグマ事情

2023年度、過去最高のヒグマ大量出没を経験した知床。大量出没年の翌年は、前年の駆除数増加などによりヒグマの個体数が減少するため、翌年はヒグマの出没が減少してクマ対策スタッフは平穏を取り戻すというのが過去の傾向でしたが、2024年度は決して平穏とは言えませんでした。

2023年度以前の5年間（2018～2022年）で斜里町内におけるヒグマの目撃件数が1,000件を超えたのは2年間のみですが、2024年度は12月末時点でヒグマの目撃件数が1,085件となりました。またウトロ市街地におけるヒグマ出没が15件発生した他、斜里市街地やその周辺でもヒグマ出没が相次ぎました。

2024年度はハイマツ球果やミズナラ堅果の実りが良好でしたが、周期的に次の秋はミズナラの実成が悪いことが予想されることなどから、また忙しい1年になる予感がしています。

知床財団のスタッフは普段どんな仕事をしているの？
あまり知られていない日々の取り組みをご紹介します。



自動撮影カメラに写った市街地内のヒグマの様子



ヒグマ対応中のスタッフ

サケマス観察&遺跡を想うツアー in ルサ

『サケマス観察&遺跡を想うツアー in ルサ』は、ルサを訪れる方に知床の価値を伝え、その保全と利用に関心を持っていただくことを目的とした「シレコプロジェクト（羅臼町事業）」の一環です。

世界自然遺産エリアに流れるルサ川には、毎年カラフトマスやシロザケが産卵のため遡上します。また、ルサ川周辺には縄文時代の遺跡が点在しており、先住民の暮らしを知る貴重な場所でもあります。

今年は、ルサフィールドハウスでの事前レクチャー、サケマス観察や整備されたルサ遺跡への案内などを実施し、参加者から「貴重な体験ができた」と好評の声をいただきました。これからも、より深い知床の魅力を伝え続けていきたいと思っています。



のぞいてみよう！

知床での実習生活



数日間の実習の場合、共同宿泊施設に泊まることが多くあります。学校によっては炊事を当番制で行うことも。共同生活を通してコミュニケーション能力やチームワークを築けるのも実習の魅力の一つ。

また「コンビニまでの道でキツネを見たよ!」「外に出るときはヒグマに注意しようね」など、都会ではなかなか体験しがたい自然と隣接した暮らしは知床ならではのあり、学生たちにとっては貴重な体験です。

学生たちを見ていると、「知床」だからこそ、実習以外の場でも体感し、学べることが多いのではないかなと思います。

実際にきいてみた！

参加した学生の声



知床はただ美しいだけではなく、自然と人間の共存について深く考えさせられる場所だった。知床の自然は未来の世代に残すべき宝であり、そのために私たちに何が出来るかを考えるきっかけとなった。日常でも環境に配慮した行動を意識したい！



現地に足を運んだからこそ得られる学びや気づきがたくさんあった。また、知床で働き活躍する方々のパワーに感銘を受け、自分自身のキャリアの選択肢を拡げることが出来た。

学生実習のこれから

For the Future of Shiretoko!

学生と一緒に過ごしていて感じるのは、私たちが「教える立場」でありながら学生から多くのことを「教わる立場」でもあるということです。学生のキラキラした表情は知床というフィールドの素晴らしさを私たちに再認識させ、何事にも積極的に取り組む姿勢は私たちに元気やパワーを与えてくれます。

学生実習は、知床財団が培ってきた知見や経験を次世代に繋ぐことが出来る非常に有意義な場です。学生実習が学生たちの将来、そして知床の未来の一助になれるよう、今後も取り組み続けたいと思います。



知床財団の講師派遣、レクチャー対応についてはHPをご覧ください。

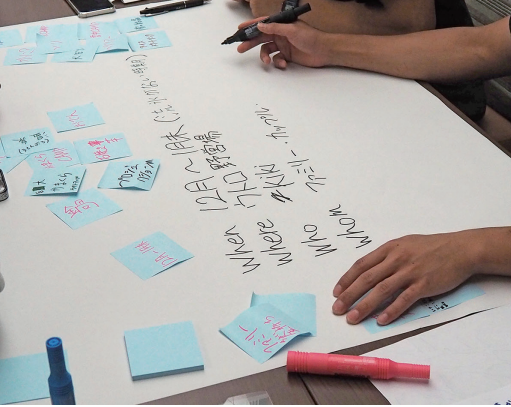


人 知床 インタビュー

聞き手 米田 紗衣
(2021年 桜井研究室 卒業生)

さくらい
りょう
さん
桜井良さん

1985年、パリ生まれ、埼玉育ち。立命館大学政策科学部准教授。学際的生態学博士。環境教育やヒューマンディメンション（野生動物管理における社会的側面）が主な研究テーマ。学生実習のフィールドとして知床を訪れ、自身の研究でも知床をテーマにしている。



地元ホテル 共同プログラムでのワークショップの様子

ウトロ学校で小中学生向けに発表する大学生

幼い頃の思い出などはありますか。

幼い頃から野生動物が大好きでした。毎年家族と日光国立公園へ行き、野生動物を見るのが子供の頃の楽しみでした。神社へ行く、「今年も日光で野生動物が見られますように」と祈願していたほどです。

大学教授を目指したきっかけはありますか。

小さい頃から動物が大好きだったので将来は動物に関連した仕事に就きたいと漠然と思っていました。大学教授という仕事に興味を持ったのは中学生の時、父親が帰ってきたニホンオオカミの再導入について書かれた新聞記事を読んだのがきっかけです。その記事を見て「大学教授は自分の好きなことを追求して、自由に発信をして良い

所で自分には立ち入れない場所だと思っていました。

知床で行われているクマ授業をどのように見ていますか。

クオリティが非常に高く、世界的なモデルケースだと思っています。知床は他の地域と違って本当にヒグマに出会う可能性があるので、ヒグマの生態的な知識だけではなく、ヒグマ遭遇時の対処法や被害防止についても伝えているのは他とは違う点だと思います。

2023年から研究室の学生研修でも知床に来てくださっていますよね。

自分の憧れだった場所に学生を連れ、さらに同じ学部卒業生が現地を案内してくれるというのは夢のようです。知床での研修は学生の自

んだ」と魅力を感じ、大学教授を目指し始めました。思い返せば、昔から好きな映画がジュラシックパークやインディ・ジョーンズなど大学教授が主人公の物語ばかりだったので無意識に惹かれていたのかもしれない。

大学卒業後、アメリカの大学院に進学したと伺っております。

高校、大学と文系だったので一度は野生動物業界を諦めかけました。しかし、当時日本では研究が進んでいなかった「社会学的からのアプローチで野生動物との共存の在り方を研究する分野（ヒューマンディメンション）」がアメリカでは既に定着していることを知り、日本でこの分野の第一人者になるということを目標にアメリカへ進学しました。

然に関する知識が増えるだけではなく、学生の価値観や人生観などを根底から変えてくれると思っています。これは知床だから出来ることだと思います。

学生の研修プログラムを作るうえで意識していることはありますか。

「自分が知床に行って味わった感動をそのまま学生に味わってもらいたい」というのが、普段の大学生活では知識を沢山頭に詰め込んだり、物事を論理的に考えたりする時間が多いと思います。そのため知床ではまずは全力で楽しんでもらえたらと思っています。と言いながら毎年、学生より私の方がはしゃいで楽しんでしまっているのですが・・・。

研修プログラムでは地域と連携して行っているものもありますよね。

当時ヒューマンディメンションの研究は日本でのくらい進んでいたのですか。

当時、野生動物の研究といえば生物学や生態学だったので、一つの学問として研究している例は日本ではほぼ無かったと思います。近年では若手の研究者も増えてきましたね。

現在はどんな研究をされていますか。

大きく分けると「ヒューマンディメンション」「環境教育」「絶滅種の再導入」の3つです。

2022年からは知床財団が行っている地元小中学校向けのクマ授業が子どもたちにどんな意識変化をもたらし、地域社会にどのように貢献しているかを研究しています。それまで知床には憧れはあったものの研究者も多く、敷居の高い場

そうですね。知床の魅力は雄大な自然、そして何より「そこに住む人々」だと思っています。そのため、学校の子ども達や観光関係の方など沢山の地域住民と関わるようなプログラムづくりを心がけています。

最後に桜井先生のこれからについて教えてください。

まずは個人で研究しているクマ授業の評価を研究成果として報告し、先駆的な知床のノウハウを全国に広めていきたいです。

学生研修については現行のプログラムを継続して行い、知床における文系学生の研修モデルを一つ確立できれば非常に嬉しいです。